



今日は、五十八回目の終戦記念日であります。

あの日、一九四五年八月十五日、青く澄み切った空に入道雲が浮かび、しゃく熱の太陽の下でせみ時雨が激しかったことを鮮明に覚えております。

正午に玉音放送があり、雑音で聞き取りにくい中でボツダム宣言受諾による戦争の終結が告げられました。が、小学四年生の自分には信じ難いことでありました。しかし、程なくして戦争に敗れたことを知り、悲しみで胸が痛む思いでありました。

その後しばらくして、脱脂粉乳がタンボール製のドラム缶風の容器で届けられるようになり、ミルク給食が始まり、進駐軍の兵士が珍しいジープに乗って学校に立ち寄り、その親しみや

すい振る舞いに怖さを忘れて安堵したものです。

戦時中は「鬼畜米英」と教えられておりましただけに無理からぬことでありましょう。

この地球上では今なお、宗教や人種の対立から、血生臭い地域紛争が後を断ちません。

この地球上の人類は、お互いに同じ人間であること



を自覚・認識し合い、自由・平等・博愛の精神を共有して、一日も早い世界の恒久平和を達成しなければなりません。

また、「生命ある星」としての、このかけがえのない地球の環境を守り、いつまでも人類を含む生きとし生けるものが、生き長らえられるよう願わずにはいられません。

さて、戦争で廃虚と化した日本は、半世紀にわたる絶ゆまぬ努力により、経済大国として見事に復活いたしました。

しかし、一九九〇年代に入るとバブル経済が崩壊し、今日まで厳しい経済環境が続いておりますが、一日も早い経済の回復と安定が望まれます。

この閉塞感のある社会で

仮想現実について

——終戦の日に想う——

土岐市長

塚本 保夫

青少年を取り巻く環境も大きく変化し、憂慮すべき事件が続発していることは心配です。

貧しかった時代は皆が共通する目標を持ち、力を合わせて豊かな社会を目指して頑張っていました。が、豊かで物が有り余る時代となつて、ややもすれば目標を見失い、情報機器の飛躍的な発展と情報の氾濫の中

で、人間関係が希薄化し、感情の趣くままの刹那主義が気にかかります。

特に、青少年の一部にテレビゲームなどに夢中になり、仮想現実（バーチャルリアリティ）に埋没し、夢と現の区別が付きにくいケースが心配です。

野山を駆け回り、転んではがをし、血を流し、痛みを自覚しながらも睡につけ

てまた遊ぶといった昔の状況とは異なり、テレビ画面とかディスプレイ上で凄惨な光景を見ても自分は痛くも痒くもなく、隔絶した空間の中で慣れてしまうことは一面で恐ろしいことです。

ここ数年、我々の想像を絶する猟奇的で悲惨な少年犯罪の続発と無縁ではないでしょう。

次代を担う青少年の心身

共の健やかで逞しい成長は何よりも大切なことであります。

そのために、少子化の進む中で、甘やかしの構造を打破すべく、集団活動の規律訓練を通してその意義を自覚し、喜びを分かち合うことがどんなに素晴らしいかを知るべきであります。

勉強も大事であります。が、ルールを重んじるスポーツも、それ以上に重要であります。

今、本市では、各地区の老若男女が力を合わせて「総合型地域スポーツクラブ」設立に鋭意取り組んでおられます。

皆さんのご協力をお願いします。

